



# 大学博物館の役割とは

中野 智章

中部大学民族資料博物館 館長、国際関係学部長・教授



見学者に館の説明をする館長(左:館長)  
小中学校教員向け大学見学会 2024年7月24日

昨年に館長を拝命し、改めて博物館のありかたを模索する中、秋には企画展として人文学部日本語日文化学科の岡本聡教授による「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展を開催しました。副館長の大場先生のエッセイにも記されておりますように、目から鱗の盛りだくさんの内容で、岡本文庫所蔵の貴重な古典籍コレクションを用いた実証性あふれる展示は圧巻でした。

学外の入場者はもちろんのこと、学生や教職員の皆さまにもこれまで知られていない芭蕉の新たな一面をご覧頂き、また館の生涯学習活動として展開している日本画講座の内容にもつながる牡丹の解説も興味深く、

さまざまなものが結びつき一つの形となった展覧会でした。展示の背景にある岡本先生の調査・研究の厚みや重みを感じるとともに、大学博物館の役割を再認識いたしました。

さてこの「大学博物館の役割」ということで申し上げれば、個人的には今をさること30数年前、当時日本では学ぶ機会が乏しかったエジプト学(古代エジプト文明を研究する学問分野)を海外で勉強した折に、週に一度、大学博物館を活用した「ミュージアム」と題する授業に出席していたことを思い起こします。

毎回、館の所蔵品を用いて博物館の一室で開催されたこの授業では、

数名の受講生に古代エジプトの考古学資料がキャプションなどの情報なしに数点ずつ与えられ、形状や色、材質、特徴、用途、可能であれば、時代や出土地といった事柄の解説が求められましたが、そこには象形文字などの習得に明け暮れた卓上の勉強とは異なり、「実物を手に取って考える」面白さがありました。

資料の背景にある人びとの暮らしや思想、時代性といったものに対する理解を深めるための授業であったことはもちろんですが、意見を出し合う中で1点のモノに含まれる情報がいかに多いかを実感した経験は、同時に自身の観察力の乏しさを思い知る

## 索引

- ◇巻頭  
「大学博物館の役割とは」  
中部大学民族資料博物館館長・国際関係学部長 教授 中野 智章
- ◇「江戸文化の魅力ー2024 秋季企画展に想うこと」  
中部大学民族資料博物館副館長・応用生物学部 環境生物科学科 教授 大場 裕一
- ◇2024年度 活動報告
- ◇実技講座  
2024年度 特別講座(古典絵画)開講  
課題制作2年目「風炉先屏風に描く」  
日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員 下川 辰彦
- ◇常設展示室内コーナー展示  
中部大学におけるトルコ文化人類学研究  
ー中山紀子教授の調査と研究  
中部大学国際関係学部国際学科 教授 中山 紀子
- ◇企画展  
2024年度 秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」  
中部大学人文学部 教授 岡本 聡

- ◇講演  
2024年度 秋季企画展関連講演  
「元禄(江戸)の牡丹ブームと芭蕉」  
中部大学民族資料博物館
- ◇ギャラリートーク  
2024年度秋季企画展関連ギャラリートーク  
中部大学民族資料博物館
- ◇企画展  
特別講座(古典絵画) 2023年度・2024年度受講生作品展  
ー風炉先屏風に描く  
中部大学民族資料博物館 原田 千夏子
- ◇教育普及活動  
CAAC 授業「旅と文学」内見学解説
- ◇施設利用  
主なグループ見学報告
- ◇2025行事案内
- ◇トピック  
中部大学キャンパスアートマップ改訂

時間でもありました。今では、展覧会を開催する折にキャプションや解説をどこまで付けるべきかいつも悩めますが、そこには、細かすぎる情報が逆に観る人の想像力を奪ってしまうのではないかという思いがあります。展示のテーマや内容に則した情報を示すことは重要ですが、ご覧になる方一人おひとりが各々の作品から得ら

れるものも、時にはそれにも増して重要ではないかと思うためです。

当館には、保育園や幼稚園など未就学児の幼いお子様たちが来館される機会も少なからずありますが、その豊かな発想に驚かされることもしばしばです。大学は調査や研究からさまざまな知識や技術、概念などを生み出すとともに、時に既存のものを打

ち破る場でもあると思いますが、当館はそれらを紹介する場であると同時に、豊かなイマジネーションを育む場でもありたいと思います。この新年度からは事務室が館内に移転し、職員が来館者の方々と接する機会も増えました。私たちもまた、さまざまな見かたを学び、今後の活動に活かしていきたいと願っております。



秋季企画展関連講演後の質疑応答の折に話題を投げかける副館長（右）

## 江戸文化の魅力 — 秋季企画展に想うこと

大場 裕一

中部大学民族資料博物館 副館長、応用生物学部環境生物科学科 教授  
(中部大学蝶類研究資料館 館長)

中部大学民族資料博物館の秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」は、大変な好評で、当館としましても自慢に思える特別な展示となりました。ご来館くださった多くの方々に感謝しますとともに、全面的な協力をいただいた岡本聡教授に深くお礼の意を表したいと思います。

本当に素晴らしい企画展でした——副館長の私がこのようなことを申し上げると手前味噌に聞こえるかもしれませんが、企画すべてのアイデアは岡本先生ご自身によるものですから、私がそう言っても構わないと思います。

何より私が感じ入ったのは、展示に新しい発見とそこに至る物語があった

ことです。もちろんそうであったのは、ひとえに岡本先生が第一級の国文学者であるからに他なりません。それはまるで、われわれ研究者が初めて手に取った学术论文を貪り読むときのような知的興奮を与えてくれるものでした。

松尾芭蕉とボタンの花にどんな関わりがあったのか。その説明をシロウトの私がここで述べるような野暮はいたしませんから、詳しく知りたい方は他稿をご覧ください。

それでも生物学者としての私が面白いと思ったことだけちょっと書かせていただきたいのですが、それは江戸時代の日本に花開いた育種ブームのことです。

世の中が安定して町民にも遊びの余裕が出てきた江戸時代、寿司や蕎麦や天ぷらといった日本食文化が多様化し、浮世絵や俳句をはじめとする民間美術と文芸が栄え、和算や本草・博物学のような科学的趣味までが町人の間に広がったことは驚きです。そして遺伝的形質を改変して品種を作出する「育種」もまた、江戸文化を特徴付ける科学とモノづくりが融合したひとつの民衆芸術と言ってよいでしょう。わずかな形質の違いを持った突然変異個体を見つけ出しそれら同士掛け合わせを丹念に試行することで、花びらの形が変わったアサガオや毛色の面白いハツカネズミを作出する知的な遊びが大いに流行ったそうです。そして、これは岡本先生に教えていただくまで知らなかったのですが、ボタンの育種も江戸元禄時代に大流行したらしく、そこになんと俳聖芭蕉との交点があったというのですから驚きです。まさに、多様な文化がひしめく江戸時代、ここに文化と文化同士が衝突したというわけです。

ちなみに、芭蕉は手付かずの自然そのものをスケッチした脱俗俳人のように思われがちですが、人の手が加わった育種植物のことを詠んだ俳句もあるのです。例えば、私の故郷は山形県なのですが、山形県人ならば誰でも空で覚えている芭蕉の句に「まゆはきを俤(おもかげ)にして紅粉(べに)の花」というのがあり、山形の尾花沢で見た紅花畑のベニバナを詠んだものだと言われています。そのベニバナも、長い人為選択の歴史を経て作出されたまさに育種植物なのです。

4  
2024 月1  
2025 月

実技講座

## 2024年度 特別講座(古典絵画)開講 課題制作2年目「風炉先屏風に描く」

Ⅵ 期間 Ⅵ 2024年4月17日(水)～2025年1月15日(水)

Ⅵ 場所 Ⅵ 中部大学10号館106 J ゼミ室

受講者数：12人(有料・定員制・通年)

指導講師：下川 辰彦 (日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)

担当：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

近代以降、高校までの学校教育ではカリキュラムには、日本画は含まれてこなかったことから、日常生活では日本画に触れる機会が非常に少ないといっている。顔料や墨を指で溶き、筆を使って描く所作は効率的でなく、天然材、人工材にかかわらず手間のかかる材料は高価で誰もが入手しやすいというものでもないことも関係しているだろう。にもかかわらず、日本画を学びたいという声は消えることがないという現状は不思議である。

特に、芸事や稽古事の盛んな東海圏では、これまで長年、各所の文化センターへ指導に赴くなかで感じ取ってきた。機械化や土地開

発が目まぐるしく進む現代にあって、戦前の風景を知る世代にとっては、日本の気候風土で発達した絵具や和紙の色みや風合いのなかに日本の原風景の記憶のようなものを本能的に求めているのかもしれない。私自身は作家として活動している立場から、常に表現には感性でみつめることが基本であり、表現の喜びであると感じている。そのことを軸に、この講座では、モチーフを映すだけでなく、自身で自由にアレンジを入れて創作作品に仕上げることも良いこととして、日本画の伝統と現代の感覚との両面を常に意識することに触れてきたつもりである。

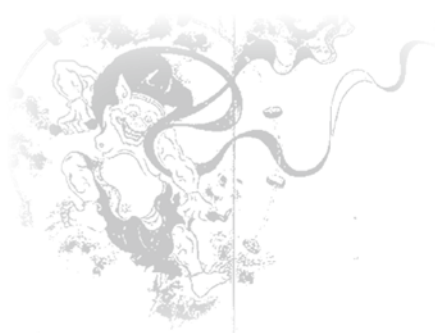
2023年度から2024年度にかけて提案した風炉先屏風制作では、これまでの工程の応用の一つとして位置づけ、小ぶりではあるが小下図、大下図を作り、それをもとに転写、そして地塗りの工程を経て彩色表現に進むという、本格的な作業の段階を通じて順を追って進行するようにした。とりわけ2年目は、彩色表現にじっくりと時間を割き、各人の進行に合わせながら、伝統的な絵具の色みの配色や、色彩学に基づく色面の重ね塗りの効果など、実演で日本画の特徴的な性質をさらに具体的に伝えることを心掛けた。 (下川)



特別講座の教室風景  
(右・指導講師の下川辰彦先生)



特別講座の教室風景  
(制作の過程で画面全体の構図や配色を見直す時間)



常設展示室内コーナー展示

# 中部大学における トルコ文化人類学研究 — 中山紀子教授の調査と研究

【期間】 2024年6月2日(日)～7月1日(月)  
【会場】 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、  
附属三浦記念図書館 1階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館  
協 力：国際関係学部

出品点数：13点  
入場者数：854人



展示ポスター

2024年はトルコと日本の外交関係樹立100周年にあたり、日本とトルコの両国で様々な記念行事が行われた。私自身も6月21日に本学においてトルコ人を含む4人の研究者による講演会を企画し、記念行事の一環とした。2024年はまた国際関係学部創設40周年にあたり、この講演会は学部の記念行事ともなった。講演会開催に合わせて、民族資料博物館長でもある中野智章国際関係学部長から本企画「中部大学におけるトルコ文化人類学研究—中山紀子教授の調査と研究」を提案していただき、当初は恐れ多いと思ったものの、これみなにかの巡りあわせと覚悟を決めた。こうして、博物館スタッフの献身的なご協力のもと、私の調査資料や関連書籍が6月2日から7月1日までの1か月間民族資料博物館シルクロード室に展示された。展示資料を準備する

期間は短く慌ただしくはあったが、可能な限り自分とトルコ人との交流を理解してもらえる資料を選んだ。展示資料についていくつか感想を述べたい。

まず、すでに寄贈していたトルコの民族衣装が飾られたことである。この服は購入したものではなく、私が1980年代にトルコ留学から帰った直後に筑波科学博のトルコレストランでバイトをしたときに記念にもらったものである。ほかにトルコ絨毯のデザインを模したベストや羊毛フェルトのベスト、チャイセットや私の研究テーマであるトルコ女性の被るスカーフをいくつか展示した。多くはトルコ人たちからのプレゼントであり、トルコ人との交流から得たものといえる。

次に関連書籍であるが、総数52点であった。展示が貧相になるのを避けるため、学生のころに書いたものまで展示した。最初の著

書は『地球の歩き方21：トルコ'87～'88年版』（ダイヤモンド社、初版）であった。また、スタッフによる展示の仕方が功を奏して、6月21日の講演会の日に出席が叶った在名古屋トルコ共和国総領事とともに博物館を訪問してくれた秘書のセダー氏が、「コロナ禍下におけるトルコ人のユーモア」（『信頼』66）の記事を見て笑ってくれた。トルコ人のユーモアセンスを高く買っている私は我が意を得たりという気持ちだった。

最後に、この展示のなかでもっとも貴重だと思うのは、私がフィールドワークの村を撮影した映像である。現在でもフィールドワークをした村の人々と毎年のように会って交流を続けているが、人々は何よりも昔の写真や映像を喜ぶ。交流を継続させる映像の重要性を改めて噛みしめている。（中山）



展示会場風景



トルコの食器や衣料を展示紹介  
（資料提供／中山紀子教授）

10  
2024 月

12  
2024 月

企画展

## 2024年度秋季企画展 「江戸の牡丹ブームと芭蕉」

期間 2024年10月15日(火)～12月20日(金)  
会場 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、  
附属三浦記念図書館 1階エントランス

主催 中部大学民族資料博物館  
企画協力 岡本 聡 (中部大学 人文学部教授)  
学術監修  
協力 中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

出品点数：28点

入場者数：1,284人



秋季企画展ポスター

### 博物館企画展を終えて

日本の俳聖、松尾芭蕉(1644-1694/正保元～元禄7)が、江戸から東北、北陸、美濃(現在の岐阜県大垣市)を旅して紀行文『おくのほそ道』を著したことはよく知られている。

この旅の後、元禄四年に、芭蕉は、伊勢津藩主藤堂高久の侍大将である藤堂良長から「茂庵」「くらはし」「なびか」という最高級の「牡丹」品種の収集を依頼された。これを芭蕉は門人去来のネットワークを活用して最終的には使命を果たしたことが、去来宛ての書簡から窺える。

元禄・宝永年間の日本では、唐の時代に匹敵するほどの空前の鑑賞用「牡丹」のブームが巻き起こっていた。芭蕉は今回展示した『花壇地錦抄』に見られる四百九十四種類の牡丹の品種の中で最高級の牡丹の三品種を手に入れるようにという、かなり難しい依頼を受けていた訳である。

芭蕉は弟子の去来に依頼し、去来は、兄である向井元端にそれを託した。去来は『去来抄』という書物の中に芭蕉の俳論を残すほど、芭蕉に信頼された弟子の内の一人である。しかし、その父や兄は、日本の本草学史上極めて重要人物である事も知られている。去来の父向井元升は、幕府の依頼で長崎に赴いて、日本で初めて西洋医学を取り入れ、御水尾院の侍医となった人物であり、兄向井元端は、一条政所家の侍医でありながら、後水尾院の跡を継いだ靈元天皇に極めて近い人物であった。靈元天皇の『乙夜随筆』には、「元端物語」として「中風」など病気に関する発言が十カ所に渡って確認でき、本草学者として靈元院の牡丹栽培にも関わっていた可能性もある。靈元天皇の牡丹好きは後の神沢杜口の随筆『翁草』でも語られているほど有名であり、去来を

通してこの元端に頼む事は極めて正しい選択だったのである。牡丹は鑑賞用であるとともに医療用として用いられたのであるから、芭蕉が去来に依頼した事は正鵠を射っていたのである。本展示では、この「芭蕉」と「牡丹」の関係性に着目し、江戸時代の「流行」を通して、芭蕉やその門人たちの活発な活動の様子を描き出した。

主な展示資料は、元 中部大学人文学部教授の岡本 勝(1938-2007)の古典籍コレクション(通称「岡本文庫」)を中心とした、俳諧に関する書籍や軸物である。会場では、江戸時代の版本をご覧いただくとともに、人文学部の岡本 聡研究室に所属する学生たちが制作した、俳諧の「連句」の解釈を紹介するアニメーション映像も放映した。この度の企画では、大学院生や学生の助けを借りて、中学校の時の後輩であり、弟の友人でもある中野智章館長が全面的にバックアップして、暖かい巻頭の言葉も書いて下さった。また学芸員の方々にも非常にお世話になった。このような手作り感あふれる展示はこれを見た人々の心にも残ったものと考えている。中野館長は今後もこれをきっかけとして、さまざまな分野の先生方の展示を打診しておられ、今後中部大学の知の発信におおいに役立つものと考えている。(岡本)



展示会場風景

10  
2024 月

講演

## 2024年度秋季企画展関連講演 「元禄（江戸）の牡丹ブームと芭蕉」

Ⅵ 日時 Ⅵ 2024年10月25日（金）14：00～16：00

Ⅵ 場所 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 多目的室

題 目：元禄（江戸）の牡丹ブームと芭蕉

講 師：岡本 聡（中部大学 人文学部教授）

司 会：中野 智章（中部大学民族資料博物館長／国際関係学部長・教授）

参加：44人



講演の様子（中央：講師の岡本聡教授）

秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展において、江戸時代の古典籍を中心とした貴重な展示資料の提供、および展示学術監修を担当いただいた岡本聡教授を講師にお招きし、企画展のテーマについて資料を用いてより詳しく解説いただく機会として、民族資料博物館では講演会を企画開催した。近世文学研究を専門とされる岡本教授は、江戸時代の俳聖松尾芭蕉の手によるいくつかの書簡に着目され、そこに当時流行した牡丹ブームを背景

とした大名家の活動の実態を読み取る試みをされた。それは、芭蕉が津藩主家の依頼を受け、希少種の牡丹を入手するために、門人ネットワークを駆使して奔走した様子を資料が物語っているという内容である。元禄宝永という平和な時世の訪れのなかで生まれていた武家と文化人たちの結びつきをより具体的にイメージすることができる新たな観点として、聴衆の関心を大に引くこととなった。

講演の後には、質疑応答とともに

に展示会場にて、岡本教授により、一つひとつの展示資料の紹介も丁寧にしていただき、参加者等にとってはじっくりと鑑賞することのできる充実した時間となった。なお、本展の展示資料は、岡本教授の父君の岡本勝先生（元中部大学教授・愛知教育大学名誉教授）の収集された「岡本文庫」蔵から数多く出品いただいたことから、展示会場の一角で岡本勝先生の主著や記念資料を一部紹介した。（原田）

11  
2024 月

ギャラリートーク

## 2024年度秋季企画展関連 ギャラリートーク

Ⅶ 日時 Ⅶ 2024年11月8日（金）11：15～

Ⅶ 場所 Ⅶ 中部大学民族資料博物館 シルクロード室

解 説：岡本 聡（中部大学人文学部教授）

樗木 宏成（中部大学大学院国際人間学研究所博士後期課程3年  
人文学部 岡本研究室所属）※当時

参加：22人



ギャラリートークで解説する大学院生

秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展の資料解説には、岡本聡人文学部教授の研究室所属の学生たちが手分けして文献調査をして作成した。このことから、研究室を代表して、俳諧文学を勉強している大学院生に

より企画展内容を一般に向けて紹介する機会として、民族資料博物館では学生によるギャラリートークを企画開催した。当日は、図録にもとづき四章からなる展示構成の順で古典籍資料の概要説明が行われた。参加者

には俳諧に造詣が深い方々もおられ、会場内で教員と学生に感想や質問などを通じて、企画展テーマを軸にした交流のひとつを過ごしていただいた。（原田）

3  
2025 月  
—  
5  
2025 月

企画展

# 特別講座(古典絵画) 2023年度・2024年度 受講生作品 — 風炉先屏風に描く

Ⅵ 期間 Ⅵ 2025年3月21日(金)～5月30日(金)  
(会期中に指導講師による講評会を実施：2025年5月28日)

Ⅵ 会場 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、  
附属三浦記念図書館1階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館  
企 画：下川 辰彦 (日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)  
：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

出品点数：21点  
入場者数：863人



受講生作品展ポスター

特別講座(古典絵画)は、当館の地域への教育普及活動の一環として行っている、一般対象の日本画実技制作の連続公開講座で、日本画実技制作を通じて、古典絵画の材料や伝統技法を学ぶという内容となっている。毎回、指導講師により課題制作のテー

マが提案されることになっており、2023年度と2024年度は、茶室で用いる風炉先屏風の作品制作であった。今回の展示では、その下図作りから2年間にわたり制作しついに作品に仕上げることでできた成果を報告することはこびとなった。本講座の指導講

師は、受講生の進行に応じて、それぞれの個性を活かしながら感性を引き出すよう様々な工夫をしてきた経緯があり、受講生各自の作品から、制作に対する真摯な姿勢と熱意を感じ取ることのできる展示となった。(原田)



展示会場風景



1階エントランス 展示風景 (賛助出品作品)



講評会で作品を説明する受講生  
(後方中央に指導講師と副館長)



作品を講評する指導講師の下川先生(中央)

11  
2024 月

教育普及活動

## CAAC 授業「旅と文学」内見学解説

Ⅱ 日時 Ⅱ 2024年11月15日(金)

授業担当：岡本 美和子 (CAAC 授業「旅と文学」講師)

作品解説：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

参加者数：14 人

内 容：所蔵資料について解説と鑑賞



館職員による作品解説の様子

解説題目：『源氏物語絵巻』～彩色に託された思いと時代性

- ・大和絵・絵巻の様式的特徴
- ・国風文化
- ・平安時代の色（植物染料、顔料、金銀）
- ・祈りのための絵
- ・四季と仏教「無常観」

対象作品：中部大学蔵の大和絵の模写作品

《模写 源氏物語絵巻「柏木(三)」》(原本 徳川美術館本)

《模写 扇面古写経絵図》(原本 東京国立博物館本)

《模写 平治物語絵巻 六波羅行幸巻》(原本 東京国立博物館本)

日本画の顔料と染料の重ね塗りの色見本パネル

(制作：中部大学民族資料博物館)

7  
2024 月

施設利用

## 小中学校教員向け大学見学会

Ⅱ 日時 Ⅱ 2024年7月24日(水) (見学風景 巻頭写真参照)

実施校：春日井市小・中学校社会科教員の夏期研修に  
おける大学見学会内での展示室見学

参加者数：32 人

2  
2025 月

施設利用

## 小学校スタンプラリー見学

Ⅱ 日時 Ⅱ 2025年2月7日(金)

実施校：春日井市立北城小学校

(担当／国際・地域推進部地域連携課)

参加者数：102 人

内 容：展示室にてスタンプラリー式鑑賞



小学校スタンプラリー見学風景

# 学校法人中部大学保育園 ちゅとらのおうち園外保育見学

【日時】 2025年3月14日（金）

実施園：学校法人中部大学保育園 ちゅとらのおうち

参加者数：13人

内容：展示室見学、民族衣装体験、民族楽器体験



ちゅとらのおうち園外保育・見学風景



2025

行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

## ◇ 2025 秋季企画展

### 2025 秋季企画展

「中部大学国際関係学部 40 周年記念展」(仮称)

2025 年秋季予定

## ◇ 2025 企画展

「特別講座(古典絵画) 2025 年度 受講生作品展」(仮称)

2026 年春季予定

お知らせ

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

### 事務室移転

2025 年 3 月 21 日より、中部大学民族資料博物館の事務室が、展示室内の一角に移転しました。  
お問い合わせ用の E メールアドレスも一部変更になりました。

(新アドレス)

chubu-minzoku@fsc.chubu.ac.jp

## 中部大学 キャンパス・アートマップを改訂しました (2025年2月発行)



中部大学キャンパス・アートマップ (表紙、目次ページ)

「中部大学 キャンパス・アートマップ (2024改訂版)」を作成しました。

本冊子は、2019年度の学校法人中部大学の創立80周年記念活動の折に制作した印刷物で、2023年度の理工学部新設にともない一部改訂をしました。

主な内容は、春日井キャンパスのオープンスペースにある絵画や彫刻作品など美術工芸作品が設置されている場所や、植栽の美しい景観を紹介するもので、付録地図をみながら学内を散策する際に携帯しやすいよう、小型の作りとなっています。

学内外の皆様にお気軽にご利用いただけましたら幸いです。



新たに加えた理工学部ページ (左)

### ◇印刷物名称：

中部大学 キャンパス・アートマップ  
(2024改訂版)

### ◇印刷物の設置場所：

- ・中部大学 1号館 受付
- ・民族資料博物館 受付  
(附属三浦記念図書館2階)



❖ 以下の URL より PDF データにてご参照いただくことができます。

#### ◇ 博物館 WEB サイトからの閲覧方法

民族資料博物館について > 刊行物 > 「中部大学 キャンパス・アートマップ」

<https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/summary/publication/>

#### ◇ 中部大学 WEB サイトからの閲覧方法

学生生活 > キャンパスマップ > 「中部大学 キャンパス・アートマップ」

<https://www.chubu.ac.jp/about/location/campusmap/>